



# 神戸大学における海外派遣留学の動向と留学相談の方向性

河合, 成雄

---

**(Citation)**

神戸大学留学生センター紀要, 15:75-87

**(Issue Date)**

2009-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81001036>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001036>



## 神戸大学における海外派遣留学の動向と留学相談の方向性

河 成 雄

キーワード：海外留学、留学相談、アンケート、ケース

はじめに

以前に日本人学生の海外派遣留学についてアドバイジングのあり方の理論化を試みたことがあるが、神戸大学留学生センターにおいて海外留学相談を開始して10年以上が経つこともあり、本論では、前回のような一般的な理論ではなく、神戸大学内の海外留学の現状に絞りこみながら、その傾向なり、対策なりについて分析することにする<sup>1</sup>。そのため、神戸大学での全体的なデータを一方であげながら、他方筆者の担当する海外留学のケースからの経験をもとに最近の学生の動向について論じたい。

扱う資料としては、海外留学フェアでのアンケートの2007年、2008年からの結果集計、及び筆者の最近の相談記録を使うことにする<sup>2</sup>。本論では、アンケートのデータを基礎としながら、日ごろの留学相談で得られた経験をもとに論じるが、アンケート上の数値と留学相談での内容との関連や相違を示すことによって本学の海外留学の方向性をよりよく示すことができると考える。

本論に入る前に、筆者は留学生センターにおいて、海外留学の情報提供の資料を収集する傍ら、全学的に一人で留学相談を担当しており、学内募集の交換留学等のプログラムによらずに海外留学する多くの学生に日々接していることを前置きとして述べておく。

0

各項目において、アンケートの基礎的な数値をまずあげた後に、海外留学相談での実態との相応について事例をあげながら検討する形をとる。

### 1 海外留学の形態

海外留学は、大学の課程に所属する場合と語学留学に大別されるが、「どのような留学を考えていますか（複数回答可）」という質問に対し次のような結果が得られた<sup>3</sup>。

	区分	回答数	割合
a	大学院留学	16	22%
b	学部留学	29	39%
c	語学留学	24	32%
d	専門学校	0	0%
e	ワーキングホリデー	4	5%
f	その他	1	1%
g	無記入	0	0%
合計		74	100%

複数回答可であるので、これらの数字がそのまま神戸大学生の海外留学の割合を表すわけではない。とりわけ語学留学は単独で選ばれることが少なく、大学院留学以外の全ての項目と多少ならず重複している。またこれは、項目3の「留学目的」で述べるように、語学力の向上を考える学生が多いことにも関連している。

まず、これらのデータで筆者にとって印象的なことは、大学院の希望者が多いことである。なぜなら、海外留学相談にはあまり大学院生や大学院留学の希望の学部生が来ないからである。その大きな理由は、大学院の留学というものは、専門性が高く、しかも指導教員との関係が密接であるので、留学の指導は多くの場合、研究室で行われていて、大学やコースを選定したりする上で改めて相談を必要としないからではないかと思われる。留学生センターでの留学相談では学部生の時の留学が主流であって、大学院留学で来るとすれば、専門を変更したい場合、指導教員とうまくいかない、などの問題を抱えているケースや、卒業後日本を出たいという願望があるケースが見られる程度である。本アンケートはフェア開催時に実施しているので、その場合、研究室等で具体的にどの大学で何を学ぶかはっきりしていても、海外留学の準備の流れなど一般的な手続き的なことを聞きに来る学生が多いため、留学相談の場合よりも比率が多くなる理由であると考えられる。また、現在は学部生であるが、将来的に大学院でも留学するかもしれないという学生の割合が数値に入っているととも考えられる。

また、ワーキングホリデーを選ぶ学生が4名いるが、実際にワーキングホリデー

で留学する学生は非常に少ないと思われる。なぜなら、ワーキングホリデーの仕事内容はごく限られたものであったり、待遇もよくなかったりするので、留学を目指す当初と異なって最終的に選ばれることはあまりないのが現状であるからである。これに関連することであるが、語学学校への留学とインターンシップやボランティア活動などを組み合わせたいという学生は留学相談では少なからずいる。これにはフェアに來ている学生はまだ海外留学の知識が乏しいのに対し、留学相談で会う学生は相談の過程でワーキングホリデーの実態があまりよくないことを知るにつれ、それに代わる方法・形態を考えるからである。ワーキングホリデーを希望する学生は、資金の不足と、学校外での現地での関わりを求めたいことがその主たる理由であるが、後者の場合、明らかにインターンシップやボランティア活動が適切かつ優れているのであり、前者の場合は経済的な問題についての対策を考え直したほうがよいのである。

次に相談事例から見ると、語学留学を大学への留学とともに希望する学生は多いのであるが、次のようなケースが非常に多くみられる。この種のケースは多くあるので共通項だけを抜き出しておく。

#### ケース1（学部1年生）

将来1年間、あるいは半年留学するが、英語圏に行くことは決めている。学内の交換留学制度を利用したいが、休学して全く私費で留学することも視野に入れている。主な目的は英語力を伸ばし、将来、就職などに活かしたいので、語学留学でもよい。

このようなパターンの学生は非常に多く、最終的には、本人の語学力、興味などによって決定されていくことが多い。学生のTOEFLの点数等、語学力がすでに交換留学の条件を満たしているか、近々満たしそうな場合、問題は小さい。しかしながら、獲得したTOEFLスコアが低い場合、低い得点で入学を認めてもらえる大学を探すのか、あるいは語学留学だけをするのか迷うケースが多く見られる<sup>4</sup>。

一般に、語学留学の利点は、行く時期・期間を就職活動や、暇な時期に合わせて調整ができることである。他方、語学学校では、ネイティブの人と知り合う機会が少ないこと、期間が長くなるほどモチベーションが下がってしまうというデメリットが見られる。経済的観点から見れば、交換留学が最も安くつき、ついで、語学学校、私費による学部留学の順になるので、交換留学に合格すれば1年間留学する

が、不合格の場合は期間を短縮するという学生も見受けられる。

## 2 留学先の地域

「どの国に留学を希望していますか」という質問に対して次のような結果が得られた。

	国名	回答数	割合
a	アメリカ	20	21%
b	英国	22	23%
c	カナダ	8	8%
d	オーストラリア	14	15%
e	ニュージーランド	2	2%
f	英語圏	10	10%
g	中国	1	1%
h	韓国	0	0%
l	ヨーロッパ(非英語圏)	14	15%
j	無記入	3	3%
k	その他	2	2%
合計		96	100%

一見して、英語圏が主流であることがわかる。これは全国的な傾向以上に神戸大学の学生が英語圏への留学を望んでいることを示している。この数字は偏りすぎている印象を受けるが、年度初めの「海外留学フェア」は一般的な留学説明会であることにもよるだけかもしれない。なぜなら、留学相談では、かなり多様な行き先への相談も受けているからである。また、もしフェアで、各国留学のブースでも設ければ数値がアジアへの留学はもう少し多くなるのが予想される。英国が希望先の1位であるが、最終的には、留学費用の面などから他の英語圏に変更する学生は多い。次項で述べるが、オセアニアへの留学は就職活動による影響を受けないというメリットがあるので、そのような知識を得るとともに、英米への留学先の偏りは実際に

は減少する。

またこの項目では、非英語圏のヨーロッパを希望する場合、英語での授業を受ける場合と現地語で受講する場合の2通りが考えられることを付け加えておきたい。留学相談の経験からすると、もともと英語圏を希望していても、ヨーロッパでの英語によるコース・授業の受講に切り替える学生は多いので、英語以外を母語とするヨーロッパに行く学生の割合はもう少し多くなると考えられる。その理由は、北欧のように授業料が無料のところや年間数万円のところがあり経済的に行きやすいこと、また、神戸大学での各部局での英語圏の交換留学枠が小さいことや、英語圏以外での英語力のハードルがやや低いために、ひとつの選択肢として学生が考えることによる。フェアに来る段階では通常そのような知識はないためにアンケートとの数値が異なるのである。また、留学相談においては、ヨーロッパに限らず、留学先は多様化してきていると感じられる。

前項の「留学形態」にも関わることであるが、ここ2、3年急速にヨーロッパでの英語による留学が増えているので、そのケースを見てみよう。

#### ケース2（学部2年生）

本来は、英語圏に留学したいと思ったが、所属学部の交換留学先に適当なところが少ないこと、また、もともとヨーロッパに留学したいと思っているので、ヨーロッパ内での英語による授業や指導を受けたい。また、その場合「英語力は身につくでしょうか」という質問をする。

このようなケースの場合、非英語圏のヨーロッパで適当な交換留学が学生の所属部局にあるかどうかはまずひとつのポイントである。交換先がある場合、筆者は体験者へのインタビューから得た知識（授業内容、学習環境など）を伝えるとともに、学生交換先からの現地学生を紹介することもある<sup>5</sup>。「英語圏に留学したいが、どこの英語がいいでしょうか。また、訛りがあっても大丈夫でしょうか。」という非常によくある質問と関連することであるが、英語の習得についても述べておく必要があると思われる。実際に体験者にインタビューした結果から言えば、授業において、いろいろな英語を聞き取り、自分の意見を述べるということが留学前にはできていない学生が多く、その場合、約半年で語学的な問題をクリアできるようになると同時に授業についていけるようになったという話を聞く。したがって、英語圏でなくとも大学において、英語によるコースがある場合には、十分英語力を伸ばして留学

を終えてくると考えられる。

ヨーロッパでは授業料無料あるいは年間10万円以下の地域の大学があり、休学して留学する場合、英語圏に行くよりも100万円以上、安くつくことが多い。ただし、交換留学の枠外で行く場合には、受講できる授業の種類・数に制限があるというデメリットはある。しかし、学部レベルの留学の場合、専門の勉強をしっかりとやるよりは、専門の知識を生かして英語力をカバーしながら授業についていく状態であるので、幸か不幸かこれはあまり大きな問題ではない。そのように考えると、経済的メリットもあり、非英語圏のヨーロッパへの留学は交換の制度がなくても非常に魅力的であるはずなのであるが、神戸大学生の傾向というべきか、あるいは日本人全体の傾向であるのか、興味はあっても、まだまだ他人と異なる留学に飛び込んで行くのが怖いという学生が多いというも事実である。

### 3 留学期間と時期

「どのくらいの留学期間を希望していますか」という質問に対し次のような結果が得られた。なお、どの時期に行くかはアンケートでは尋ねていない。2度以上留学する学生もいるので複数回答可とした。

	期間	回答数	割合
a	1ヶ月未満	5	8%
b	1ヶ月	4	6%
c	2ヶ月	3	5%
d	半年	11	17%
e	1年	32	50%
f	2年以上	7	11%
g	無記入	2	3%
合計		64	100%

1年間と答える学生が半数いる。語学留学の希望者が多い割には2ヶ月以内の短期留学の希望者が少ないのは、短期間の語学留学では情報をさほど必要とせず、自

力で手続きできるのでフェアに来ないためであると考えられる。

学部生の場合、留学期間を1年とすると、4年で卒業するか5年で卒業するかということが大きな問題になっている。実際に1年留学した場合、交換留学のように単位互換などの制度があっても9割以上の本学学生は5年で卒業することを選ぶ。その理由は、2年生から3年生にかけては専門課程との関連で動きづらい場合が多く、3年生の後期から留学する学生が多いことによる。そうなると、就職活動との兼ね合いでどうしてもさらに1年卒業を遅らせたほうが得であるということになる。留学生センターでは年2回、海外留学フェアにおいて「留学体験談」を語ってもらっているが、1年遅れることのデメリットは少ないという意見は体験者の中で一致するところである。したがって、5年間で卒業することはそれほど問題でないとも言えるのではあるが、留学相談の段階（留学前や留学計画中）では、やはり、5年かけることに躊躇する学生は多い。解決すべき問題ではあるが、単位互換のように学内で扱えるものでもなく、就職上の問題は1大学の努力としてはどうにもならないと筆者は考えている。この点に関して言うと、留学時期と期間に関してはオーストラリア・ニュージーランドに行くメリットは大きい。なぜなら、2年生の2月から3年生の10月（試験を受ければ11月）まで留学するのが可能であり、就職活動上、支障が小さく、また、日本での実質4ヶ月の休み（春季休業と夏季休業）が有効に使えるからである。ただ、このような情報は一般には知られていないのでフェアなどで周知していく必要があると考えている。

留学時期に関するケースとして次のものをあげておきたい。

### ケース3（学部3年生）

1年間留学したいが、どのような準備が必要であり、どこに行くことができるのかと問い合わせてくる。

3年生になってからこのような問い合わせをしてくるケースは多々ある。1年間留学希望するならば、たとえ、5年かけて卒業するのであっても、2年生の夏季休業の頃までに行く先を決定するのがタイムリミットである。実際、海外留学フェア等で啓蒙する必要があると常々感じることである。しかしながら、漠然と留学を考えているうちに3年生になってしまったというケースが後を絶たない。

次に、まったく異なるケースをあげる。

#### ケース4（学部4年生）

就職が内定しており、4年生の7月頃から12月頃までは時間があるので留学したい。資金的にも両親から援助してもらえるから心配はない。今から（4年生の5月、6月から）準備してどのような留学が可能であろうか。

4年生の留学相談は学部を問わず、社会に出てからの時間の使いかたを考えて、残りの学生時間を考えて相談に来る場合が多い。その結果、「英語+」と呼ばれている留学形態、つまり、午前中は英語の集中コースをやって、午後自由に趣味などをコースに組み込むのである。社会人になれば、時間がなくなるので、学生の今に趣味（スポーツ、観劇、音楽等）を留学に初めから組み入れようとするパターンである。1年生の留学相談と対照的であり、入学時点では到底思いつきそうにない、遊びや趣味を大いに考慮した留学形態であり、4年間で必ず卒業し、なおかつ、まとまった海外経験を積むには有効であると考えられるので、筆者は1年生に対し、時折、こういう考え方もあると紹介することもある。

#### 4 海外留学の目的等

「将来、海外留学をどのように活かすつもりですか（複数回答可）」という項目では、次のような結果を得られた。

	区分	回答数	割合
a	研究	20	18%
b	就職	22	20%
c	語学力の向上	40	37%
d	社会経験として	23	21%
e	その他	4	4%
f	無記入	0	0%
合計		109	100%

「語学力の向上」が第1位を占めるが、回答者45名のうちの40名ということであるから、ほとんどの場合、語学の習得は重要なポイントになっていると言える。留

学相談をしても気づくことであるが、この結果は、学部への留学であっても、必ずしも専門の勉強がしたいということではないことを示しているだろう。次に、就職に活かそうという学生が約半数（20 / 45）いるが、実際に留学経験者で就職活動の終わった学生に聞くと、就職活動上ではアピールにはならず、あくまでの自分のために就職のときの視野を広げたり、将来のための財産にしたりという意味でなら海外留学は就職のためになるということである。したがって、留学前のイメージと留学後の現実が異なる点であるので、留学体験談などを通じて、今後も海外留学フェアで周知すべき点の一つであると思われる。

次にケースを見てみよう。

#### ケース5

とりあえず、英語圏に留学したいが、英語も上達したいし、生活も楽しみたいし、自分探しもしてみたいと思っている。

このようなケースは、大なり小なり多くの学生に当てはまると思われる。留学する大学を選び、どのような授業をとり、どのくらいの期間行くのかと考えるにあたって、果たして自分がどんな目的で留学するのか知っていることは、確かに必要であろう。しかしながら、留学体験談を聞いてみて筆者が思うのであるが、留学することによって初めて目的が何であったのか、求めていた体験が何であったのかよりはっきりする点も多く、一概には、「目的がはっきりしていないと留学はできません」と言い切ることはできない。筆者がインタビューした留学体験者に対する印象から言えば、留学の目的、留学のメリットなどについて、留学後の人は非常にうまく、明快地話すことができるようになって帰ってくるということは確かである。したがって、筆者のアドバイスとしては、相談にやってきた学生になるべく留学の目的を考えさせるが、目的がないとだめであるとまでは言わないようにしている。まずは、具体的に何をするのか学生が考えることが優先される。

#### 5 海外留学の障害

「留学するにあたって何が不安ですか（複数回答可）」という質問に対しては次のような結果が得られた。（2008年よりアンケート実施追加項目）

	区分	回答数	割合
a	学力	3	12%
b	語学能力	8	31%
c	資金	7	27%
d	現地情報の不足	2	8%
e	宿舎など生活面	5	19%
f	就職活動の時期	1	4%
g	その他	0	0%
合計		26	100%

2008年度から始めたアンケート項目であるので、いささか全体の数は少ないが、ある程度の傾向はわかるであろう。就職活動の時期を支障としてあげて学生が1名しかいないのは意外かもしれないが、フェアに来る段階では客観的な問題をまだ押込んでいない証拠でもある。語学力が「項目4」で示したように第1の留学目的に来るとともに、同時に大きな障害にもなっていることは興味深い。1年間や半年の留学において、語学の習得を超えて、専門の勉学・研究を十分になしとげるケースが少ないのではないかと危惧される。この点は、交換留学で設定するTOEFLの最低点に達しない学生が多いことにも裏付けられる。

現地情報や宿舎などに関しては、交換留学の場合はもちろん、大学から学生にサポートしやすい面であるといえ、このような不安は解消するのが可能であると考えられる。

留学相談を担当していて、どうにもならない海外留学の障害は、経済的な問題と就職の時期につきると筆者は考えるようになった。

#### ケース6（学部生）

アメリカに1年間留学したいがどのくらい費用がかかるか知りたい。海外留学に関して、奨学金のことが知りたい。

まず、奨学金については、探し方は教え、とりわけ国内の情報は伝えるが、実際

には奨学金はないに等しく、私費で多くを賄わなくてはならない。交換留学に限って言えば、学内の奨学金があり、留学先の授業料が基本的に免除されるので比較的経済的な問題はないと言える。留学費用については、留学関連雑誌等では「通常1年間で300万円かかります」というようなことが書かれていたりするが、そのようなことを伝えるかわりに、学費、宿舎、それ以外とに分けて実際にシミュレーションするなり、個々のケースに従って学生が具体的に考えるようにしている。いずれにせよ、経済的な問題はアドバイザーとしてもどうしようもない部分であると言える。それに対して、就職に関して言うならば、相談に来る時点では4年間での卒業にこだわる学生は多いが、5年間で卒業するようにすれば、問題はないと考えるようになるケースも多い。ただ、本来の大学の教育の形から言うとは不自然であると言えるだろう。

#### まとめ

主としてアンケートの項目に沿って海外留学の相談のあり方について考えながら、神戸大学の海外留学の実態について考えてみた<sup>6</sup>。今後の課題としては、海外留学フェアに来る学生とそれ以外の学生との比較、相談に来た学生が留学後どのように意識が変化するかということ进行调查する必要があると考えている。

#### <注>

- (1) 神戸大学留学生センターでの海外留学相談は1998年にたちあげ、そのとき以来、河合が担当している。ただし、学内では他に相談機関はないものの、交換留学等、それぞれのプログラムの担当者も相談に乗っていると思われる。前回まとめたものは、河合成雄「海外派遣留学のアドバイジングのあり方についての試論」『神戸大学留学生センター紀要』11号、2005、pp.87-97。
- (2) 神戸大学留学生センターでは、年4回海外留学フェアを開催しているが、年度初めでの第1回目でのアンケートを使用する。2007年度の有効回答数は35名、2008年度は14名である。
- (3) それぞれの表の項目が数値の多い順になっていないのは、アンケート上の項目の順序に合わせて掲載することにしたからである。
- (4) 神戸大学で、交換留学応募に必要なTOEFL iBTのスコアは80点に設定している部局が多いが、この最低点をクリアする学生は少数派である。
- (5) 興味深いことに、学生を紹介することによってかなり現地への関心が高まる

ことがある。これは、留学前からある意味では異文化体験を始めていることになる。交換留学で行く場合でないときにも、海外からの留学生を紹介することがあるが同様に影響を受けることは強いように思われる。

- (6) 海外留学フェアでのアンケートでは、他に「海外留学の経験はありますか」「それはどこで、どのくらいの期間ですか」「神戸大学での交換留学制度を利用してみたいですか」「この海外留学フェアを何で知りましたか」「留学生センターで留学相談を実施していることを知っていましたか」「きょうのフェアは有益でしたか」「発表者の話はわかりやすかったですか」を尋ねているが、本論ではあまり関係がないので割愛した。

## Questionnaire and case studies related to studying abroad at the Kobe University

KAWAI Naruo

Study abroad, advising, case study, questionnaire

This paper discusses the present situation of studying abroad at Kobe University from data gathered using questionnaire and case studies. I analyze the results of the questionnaire, which we implemented at Study Abroad Fairs held by the International Student Center, presenting cases of consulting and advising, focusing on the five following points:

1. The types and periods of programs
2. Destinations
3. Length of stay
4. Purpose of study
5. Obstacles to study abroad